

# 立教大学コミュニティ福祉学部『陸前高田交流プログラム』における教育効果

Education effects of 「 Rikuzentakata Interaction Program」 organaized Rikkyo Graduate School of Community and Human Service

松山真

立教大学コミュニティ福祉学部

**概要**：立教大学コミュニティ福祉学部は 2011 年 11 月から『陸前高田交流プログラム』を実施している。5 年の経過を振り返り、その教育効果について整理する。

**abstract**： Rikkyo Graduate School of Community and Human Service had organaized 「Rikuzentakata Interaction Program」 since November 2011. In this article, consider the Program at the point of education effects.

## 1. 学部プロジェクトの発足

2011 年 3 月 11 日以降、最大余震を警戒して大学は卒業式・入学式を中止し、新年度授業開始も 5 月連休明けとなった。その間、コミュニティ福祉学部教員の中で、阪神・淡路大震災時に支援活動を経験していた教員を中心に、学部の専門性を生かした救援・支援活動を組織的・継続的に活動すべきという意見が出た。『いのちの尊厳のために』を学部の設立理念としている学部として、この大震災において多くの命が失われ、いのちの危機に晒されていることに座しているわけにはいかないという思いであった。4 月 12 日に『コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援プロジェクト』（以下、学部プロジェクト）を発足した。担当教員は 7 名で始まった。

## 2. 活動準備期

学部の専門性を表す「コミュニティ」「福祉」「健康」を用いて支援活動が出来るのは、避難所から仮設住宅に移行した後であろうと考え、6 ヶ月後（10 月以降）を活動開始と定め、被災地視察を含め準備を開始した。「人」「物」「資金」「活動拠点」「プログラム」については次のようにした。

- ・「人」-学部教員 12 名が担当となり、学部管轄人件費の一部（約 900 万円）にてプログラムコーディネーター・経理担当事務・RA を雇用した。
- ・「物」-学内に専用の部屋を確保。自動車他の寄付を受ける。
- ・「資金」-学部管轄人件費のほか、学部から毎年約 300 万円を拠出し原資とした。その他、学内競争的研究・教育資金（計約 1000 万円）、さらに赤い羽根共同募金など学外助成金を獲得し、年間約 3, 000 万円の活動資金を確保した。
- ・「プログラム」-学生と教員が共に活動することで学部の専門性を体験的に学ぶことが出来るプログラムを志向する。人々の生活を理解し、信頼関係を構築し、人々のニーズに沿ったものにする必要がある。そのためには、同じ地域で長期に、交流を中心とした活動することが必要。
- ・「活動拠点」-学生と教員が共に、安全に、安心して活動出来る拠点を定めるため、教員が持つ震災以前からの関係機関などを訪ね、宿泊先・活動内容・現地コーディネーターを調査した。

被災地に行くことだけが活動ではなく、また被災地で活動できる学生は限られていることから、多くの学生が参加出来る学内プログラムと、大学近隣に避難されている地域も活動拠点とした。被災地の活動拠点は、陸前高田・気仙沼大島・石巻・南三陸・いわき(2015 年より)となった。

「活動期間」は、当初から 5 年以上を想定していた。

	短期	中期 (1 年～3 年)	長期 (5 年～10 年)
学内	◎	◎	◎
関東圏	○	○	○
被災地	○	◎	◎

5 年間で延べ 255 回プログラムを実施し、延べ 3, 000 名を超える参加者がいる。(学生約 2, 400 名)

### 3, 陸前高田交流プログラムのはじまり

不思議な関係から、小友町西下の一軒家を貸して頂くことが出来た。20名あまりの方々が避難所として使用されていたが、仮設住宅に移られ空くことで貸して下さるということになった。布団、食器、冷蔵庫、電子レンジなど生活に必要な物は全て整っている家であった。多くの団体が宿泊先を探し遠野や一ノ関から通っている中で、陸前高田市内に安全な拠点を設けることが出来たことは、大きな財産となった。2012年度松山は1年間の研究休暇を許されたことから、この小友町の家に住み活動に専念することにした。個人的活動をする中で人間関係を広げていき、学生を連れて行ける場所も開拓していった。また「泊まることのできる家がある」という特徴を最大限生かすプログラムを考えた。

### 4, 陸前高田交流プログラムのコンセプト

同じ場所に、何度も繰り返し訪問する中で、学生と住民の間に安定した関係が築かれる。その関係の中で行う活動は、学生・住民双方に多くのもをもたらしした。そのコンセプトは以下のとおりである。

- 1) 「支援する人」と「支援される人」の関係にならない(ボランティアをするのではない)
- 2) プログラムの「準備された交流」は、「はじまりのはじまり」にすぎない
- 3) 自分から手紙を出し、「本物の交流」へと発展させて欲しい
- 4) 学部理念「いのちの尊厳のために」を学びとる教育活動

仮設住宅、仮設店舗、災害公営住宅などで交流を重ね、その後手紙を書き写真と共に送っている。卒業しても手紙を送り続ける者や、個人的に訪ねて行く者も居る。現地に就職する者も出ている。

### 5, 学生にとっての学び

#### 1) いのちの尊厳を学ぶ

このプログラムに参加した学生は、「陸前高田に来た」ということだけを喜んで貰える体験をする。名前も能力も成績も関係無く、存在そのものを喜んで貰えるという体験をする。陸前高田には、津波の悲惨さや破壊された街を見に行くのでは無い。生きていることの素晴らしさ、日常生活の何気ないやりとりの尊さ、家族や人の存在の大切さ、それらを教えて貰いに行く。出会う人たちは、初めて会った学生に、命があることの大切さを直接語って下さる。多くのいのちが失われたからこそ、いのちの大切さ、日常生活の尊さを心の底から感じ入り、他者に伝えて下さる。

停電で電気が点かなくても、ろうソクが一本あれば生活が出来る。ろうソクで生活して分かったのは、家族のありがたさだった。夕食の時、おにぎりしか無くても、ろうソクを1本立てておくと、ろうソクの周りに家族が集まってくる。みんなが一つのテーブルの周りに、顔がつくくらい、くっついて座る。携帯もテレビも使えないから、みんな寄ってきて話始める。

ろうソクの生活だった時、家族とこれまでで一番話しをした。お互いのことをありがたいと思った。こんな何でもない家族との時間がとても貴重なことだと分かった。一緒に居て笑っていられればそれでいいんだ。

#### 2) 真の豊かさを知る

食べる物、遊ぶ場所、電化製品など物に溢れ、便利で効率的な社会に住む者が勘違いしてしまう、「豊かな生活」とは何かを考えさせられる体験がある。古い家にお招きし、なべ焼きや鎌餅を一緒につくり食べる。近所の方が鮑や鰹など採れた物を分けて下さる。毎回訪ねる魚屋さんでは生きたものしか売っていない。一緒に作った料理を大きなテーブルを囲んで賑やかに食べる。造り方を教わり自分で作ってみることもある。テレビも携帯も出番が無い時間が過ぎる。人間関係も、時間の流れ方も、食材も、文化も豊かな地域で有り、豊かな生き方をしている人たちに会える。

エアコンの効いたベッドに寝ている学生にとっては、押し入れから布団を出して畳に敷くこと、石油ストーブに

石油を入れることすら初体験。陸前高田に滞在する 2 日か 3 日は異文化体験にも似た体験になる。

## 6. 住民の方々にとって期待される効果

陸前高田の人たちにとっての日常に学生たちが入ることによって、お互いに非日常の時間を持つことになる。住民同士ではもう話す機会が少なくなってきた津波の体験も、学生には語ることが出来る。時間が経つにつれて、孫の話し、地域の行事の話し、文化の話し、仕事の話など日常の話しも出て来る。そこには、支援者と被災者という関係ではなく、遠くから会いに来た親戚の子のような関係がある。長く継続的に交流することによって、学生は替わっても繋がりは深くなり、共に悲しむ、共に喜ぶ体験を重ねて行く事が出来る。

これらは「支援者が被災者に対してこころのケアを行う」というハイリスクアプローチではなく、「結果的にこころのケアになっている」という自然なアプローチが取られ、効果が期待される。また、病気や症状を治そうとする介入ではなく、共に笑い合い、思い出となる写真を見てまた笑い合うという時間がもたらす効果も期待できる。

## 7. 今後の展望

震災から 6 年になろうとしている。人々の記憶が薄れていくことは自然の流れである。当初想定していた「5 年から 10 年の継続的支援」という期間の折り返しを過ぎた。大学に入学してくる学生は震災当時小学生だった子どもたちになっていく。そうした中でこの活動をいつまで継続するかを想定せざるを得ない。さらに、活動資金の調達も徐々に困難になっていく環境要因の影響も受ける。

しかし、立教大学としては「陸前高田サテライトキャンパス」を 2017 年 4 月に開設するように、立教大学と陸前高田の関係は新たな段階に移っていく。今後も学部独自のこの活動は、継続していく。当初「ボランティアをするのではない。交流をするのだ。」としてきたこの活動は、目的を変更することなく継続することが出来ると感じているし、学生にとって学部の理念を座学で無く学ぶこの活動を、今後も学部として継続して行きたい。

## 参考文献

- ・ 森本佳樹, 松山真, 和秀俊, 荻生奈苗、「コミュニティ福祉学部の震災復興支援の取り組み」、コミュニティ福祉研究所紀要第 1 号、20 13 年、pp. 107-128
- ・ 『復興支援活動 2 年半の歩み』、立教大学コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援プロジェクト発行、20 14 年 3 月
- ・ 森本佳樹, 松山真, 湯澤直美, 長倉真寿美, 大口達也『復興支援 3 年～ “伴奏” の軌跡』、立教大学コミュニティ福祉学部『まなびあい』第 7 号、20 14 年、pp. 168 -p176
- ・ 『復興支援ってなんだろう？-人とコミュニティによりそった 5 年間』、立教大学コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援プロジェクト、本の泉社、20 16 年